

# V 生物多様性の保全に向けて

## 1 生物多様性保全の取り組み

### 個人から団体、そして地域全体へ

第IV章では生物多様性の保全に向けての基本的な考え方を示しましたが、ここでは地域で考えられる取組イメージを示しました。

生物多様性保全に向けた取組は、個人や特定の団体だけでも可能で、一定の成果が得られるものと思いますが、より広い範囲へと取組の輪を広げていくことで、地域全体として生物多様性を高めていくことができます。

## 2 活動の連携

### 個人、団体、学校、企業、NPO法人等の連携づくり

生物多様性を目的とした取組や地域の連携のあり方は、地域の立地環境や社会環境によって異なってきますが、大切なことは、個人、団体、学校、企業、NPO法人などが関わっていけるような仕組みを作っていくことです。特に、地域の合意や住民参加、パートナーシップの確立などが不可欠です。また、開発や伐採の制限などの保全対策、関係法令との調整等を考える上からも、公共団体との連携も重要なポイントとなります。

## 3 生物多様性保全の取り組み例

### (1) 農業生産型

農林業のあり方が野生生物の生息・生育と密接に関わっていること、特に谷津田は丘陵地域の生物多様性を高めるという点で重要な働きをしてきたことから、農林業と生物多様性との両立を目標とするものです。農林業生産において著しい負担の増加や不利益を招くことなく、生物多様性を高めるための方策を探っていく場でもあります。

このタイプでは、農林業者の理解や協力が不可欠であり、この取組による農林業者の負担の増加に対する支援を確保することも重要な要素となります。

### (2) 生き物ふれあい体験型

耕作放棄された谷津田や放置された雑木林などを、地域における生物多様性保全の核として積極的に活用していこうとするものです。

このタイプでは、生物多様性の維持・向上を可能なかぎり高めつつ、その中で農林業の生産も実践していこうとするものです。谷津田や雑木林の維持管理、トンボ池の造成などに積極的に関わっていく団体等の役割が非常に重要になってきます。

また、都市住民の自然とのふれあいの場や環境学習の場としても活用するなど、生物多様性保全活動の普及の場としていくことも重要です。

### (3)人工の池を活用した湿地環境の再生

湿地や沼の創出イメージとして、人工の池を活用した生物多様性保全の取組と池のあるビオトープのイメージを示しました。

人工の池は、護岸がコンクリートブロック等で固められていることが多く、周囲の環境とのつながりも弱い状態となっています。このため、コンクリートブロック面の一部を改良したり、池の底面に高低差をつけるなどして多種多様な水生植物やそれに集まる生物を誘導するなど多様な環境を創出したりして、周囲とのつながりが生まれるようにします。

また、それにあわせて、周囲の水田、水路などで各種の取組を行い、地域全体としての生物多様性を高めていきます。

### (4)生き物のオアシス

生き物のオアシスでは、多くの人々が取組に参加できるよう、また個人や小規模な団体でもできるよう、比較的小規模なものを示しました。多自然川づくり、魚類の生息に配慮した水路の整備など、大規模な工事を必要とする事例は示していませんが、このような工事と連携した取組としたり、このような小さな取組を増やしていく、取組の輪を広げていくことにより、平地の生物多様性を少しでも高めていくことができます。

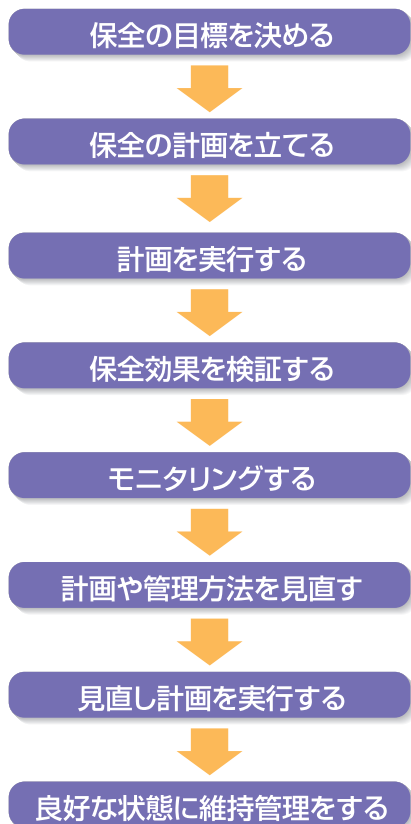
### (5)雑木林の管理

雑木林の多くも、落葉掃きや薪炭林としての管理が行われなくなって久しく、生物多様性が低下してきているといわれています。落葉掃き、下草刈り、伐採などの管理を行うことにより多様な雑木林を再生します。

## 4 取り組みの流れ

### (1) 保全目標を決める

生息場所、目標生物、活動する範囲を決めよう。



保全目標を立てる場合、まず、オオムラサキの生息地を守る、あるいは回復する、トンボ類の住める環境を守るというように、特定の生物を目標とする場合が考えられます。

この場合、オオムラサキやトンボ類は取組のシンボルと考え、シンボルが自然に住めるような環境を守る、あるいは改善していくという考え方が大切です。

すぐに目標とする生物が見られるようにと、遠くの場所から採ってきたり、買ってきて放したり、増殖して放したりすることは避けるべきです。

時間がかかっても、生息に適した環境が保全・創出できれば、次第に見られるようになります。

生息できる環境がないのに、近場から捕ったものだといって放したり、人気があるからと元々生息していなかった生物を目標とすることも避けるべきです。

荒れたため池を昔のように管理されたため池にしよう、多様な生物が住める谷津田を維持していこうというように特定の環境を目標とすることも考えられます。

この場合、見られる生物の種類を増やそうと、落葉掃きをする林、定期的に伐採する林、大木の林などと多くの環境を目標として設定することも、環境が単純化することを避ける観点からは重要です。しかしながら、動物には餌を捕って生きていくための一定の区域が、さらに子孫を残していくことを考えると一層広い面積が必要となります。区域全体の面積が狭い場合は、目標を絞った方が管理も容易になり、取り組みの成果も確認しやすくなります。

### (2) 保全計画を立てる

地元の人、参加する人の意見を聞き、無理のない活動内容で、将来をふまえた計画をたてよう。

取組の場所と範囲が決まったら、現在の野生生物の生息・生育状況を調査し、計画を立てます。その際、その地域に長く住んでいるお年寄りから昔の様子を聞ければ、自然がどのように変わってきたかを知ることができます。また、専門家の意見を聞いたり、マニュアル書を参考にしたりします。ただし、マニュアル書は鵜呑みにするのではなく、地域の実情や参加者の技術、安全の確保等を踏まえた上で、活用するようにしましょう。

参加する人々が楽しく取り組めるよう、無理な計画を避け、結果を急がず段階的な計画とすることも大切です。特に、参加人員や予算などの見積りでも、過重な負担とならないように無理のない範囲で計画していくことが意欲の減退を招くことなく取り組みを継続していくこととなります。

計画を立てるのと併せて、外来種を除去する、他地域から移入しない、移入する場合は自ら移動できる距離内の個体に限るなどと、ルールを決めておくとい良いでしょう。

### (3) 計画を実行する

**活動する人に目標や内容が十分に理解できる仕組みを考えよう。**

計画の実行(草刈り、落葉掃き、池作りなどの作業)では、集合場所や作業の場所に、初めて参加する人や支援に訪れた人々にもわかるように目標や計画の内容を掲示しておく、取り組みへの理解を一層深めることができます。

実際に作業を実施する段階になると、参加者の意見が分かれることがあるかもしれません。

例えば、池の管理でも目標を水鳥に置いた場合とトンボにおいた場合とでは管理方法も異なってきます。

トンボのためには水草を間引いた方がよくても、水鳥の場合には密生していた方がよいという場合もあるかもしれません。生物の多様性の視点からは、両方の環境が存在することが望ましいということになります。しかしながら、狭い場所の場合は目標の達成が困難になり、目標そのものがあやふやとなるおそれがありますので、目標は明確にするようにします。ただし、トンボだけを守る、水鳥だけを守るというのではなく、それらの生物の餌となる生物や、その天敵も含めた生物全体を考えて決めるべきです。

### (4) 保全効果を検証する

**計画 → 活動 → 活動内容のチェック → 目標の再検討**

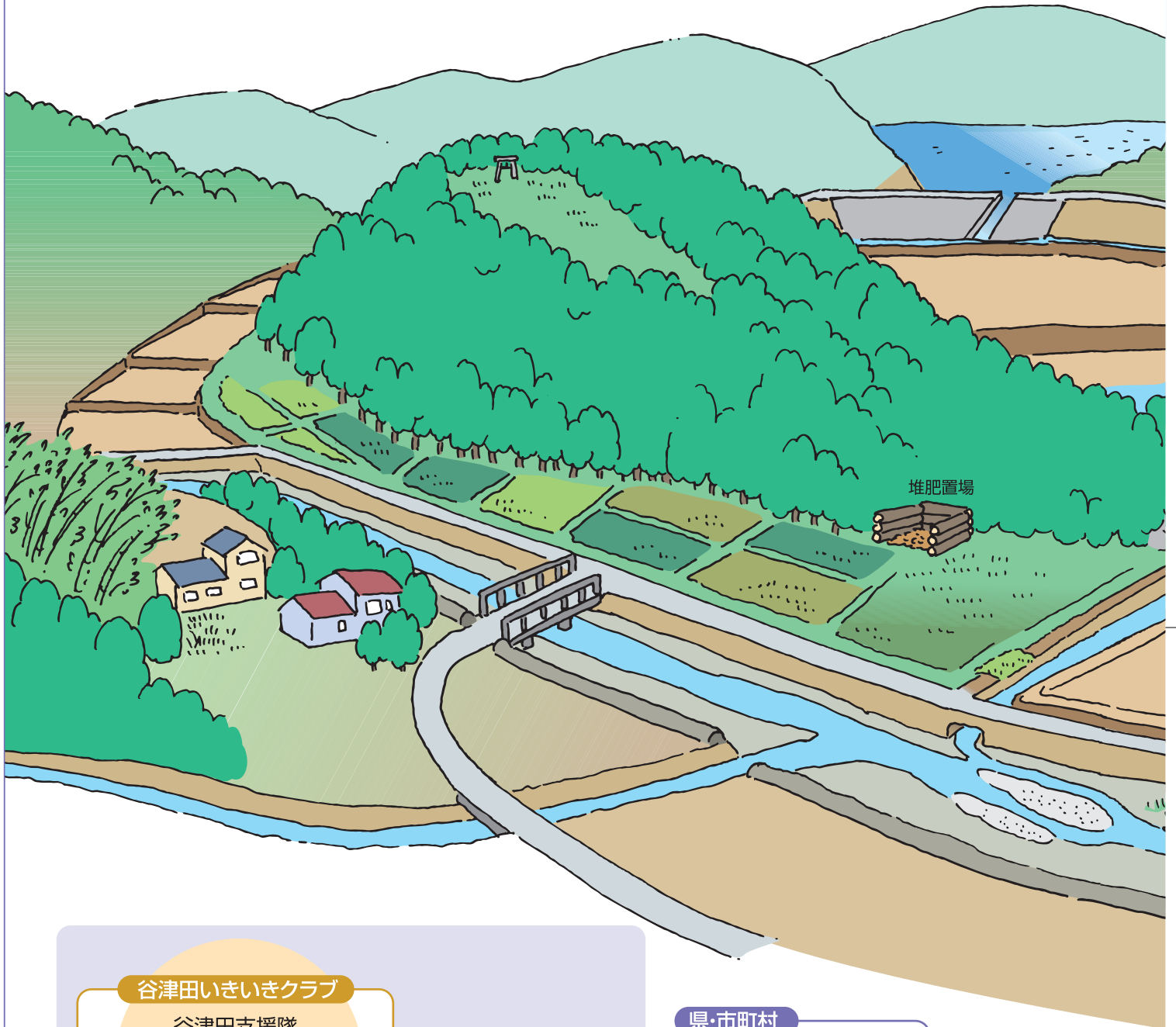
計画に従って、落葉を掃いたり、池を作ったりと様々な作業を行っていると、目標とする生物がすぐに住みつくこともあれば、何年もかかることもあるかもしれません。いずれにしても、生物の動向を観察して、取り組みがうまくいっているかどうかを生物に評価してもらいます。

例えば、ホタルを復活させることが保全目標だとしたら、ホタルの数を毎年調べることはもとより、餌となるカワニナや産卵場所となるコケの状態にも目を向ける必要があります。こうした継続調査をモニタリングといいます。それによって保全の効果を検証する必要があります。

その結果が思わしくない場合は、計画や管理の方法を変えていくことも必要です。生物が相手ですから、最初の計画にこだわらず、柔軟に対応していくことが大切です。



## 5 取組イメージ (1) 農業生産型



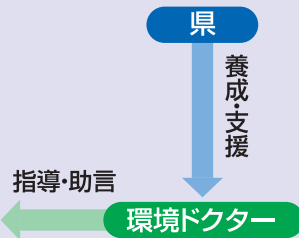
### 谷津田いきいきクラブ

谷津田支援隊  
森林ボランティア  
自治会  
NPO  
県・市町村

全体構想(地域計画)協議  
連絡調整  
合同活動  
合同調査

### 県・市町村

多自然川づくり  
生き物に優しい道づくり  
保全林の指定・公有地化



谷津田支援隊

ため池維持管理支援  
落葉掃き  
農作業支援  
キノコ栽培

農家

有機無農薬栽培  
不耕起栽培  
冬季たん水

森林ボランティア

下刈り  
萌芽更新  
植栽

動物用トンネル  
動物用の横断歩道

冬期水張り

水のポケットパーク

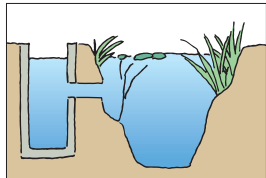
水田の魚道

動物用の横断歩道

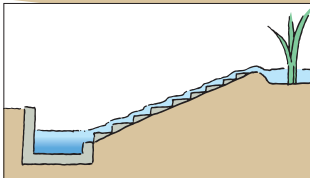
水のポケットパーク

瀬や淵のある川

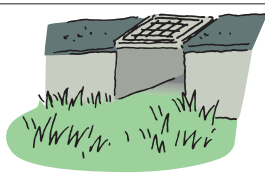
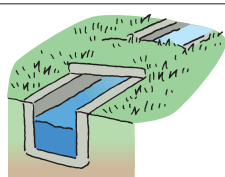
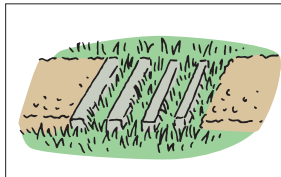
水のポケットパーク



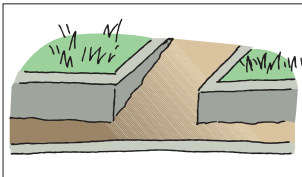
水田の魚道



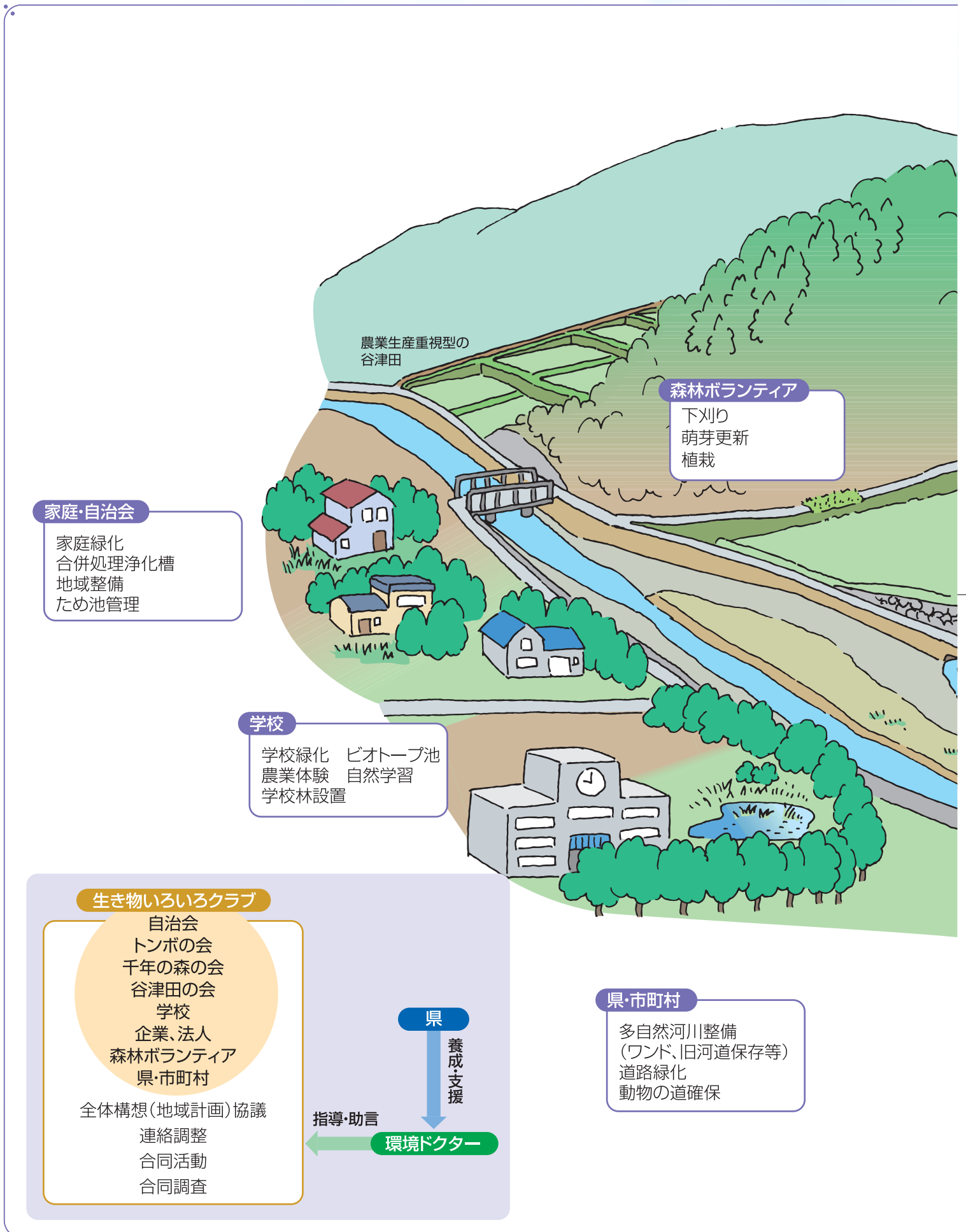
動物用の横断歩道



側溝のスロープ

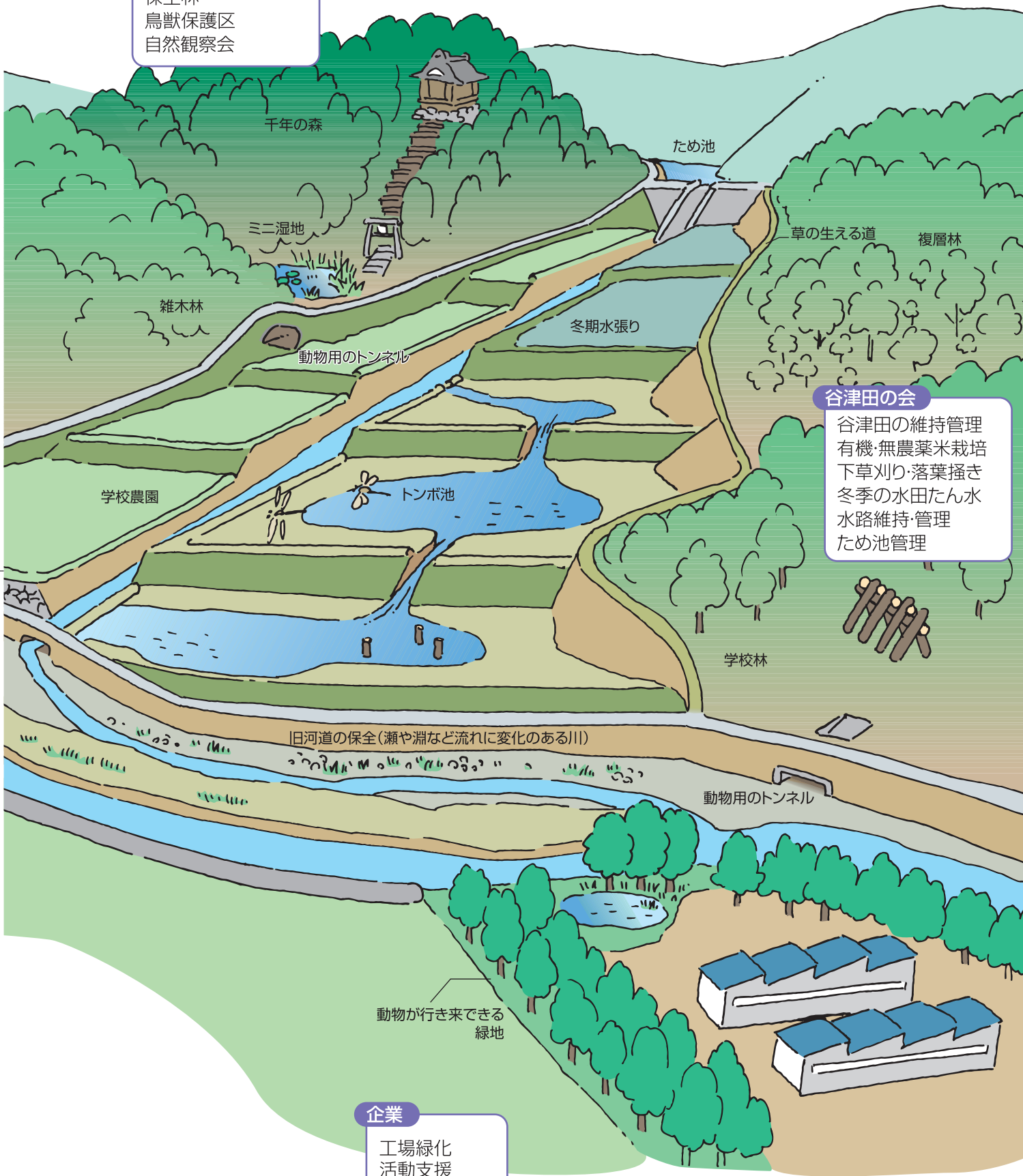


(2) 生き物ふれあい体験型



千年の森の会・県・町

保全林  
鳥獣保護区  
自然観察会



谷津田の会

谷津田の維持管理  
有機・無農薬米栽培  
下草刈り・落葉掻き  
冬季の水田たん水  
水路維持・管理  
ため池管理

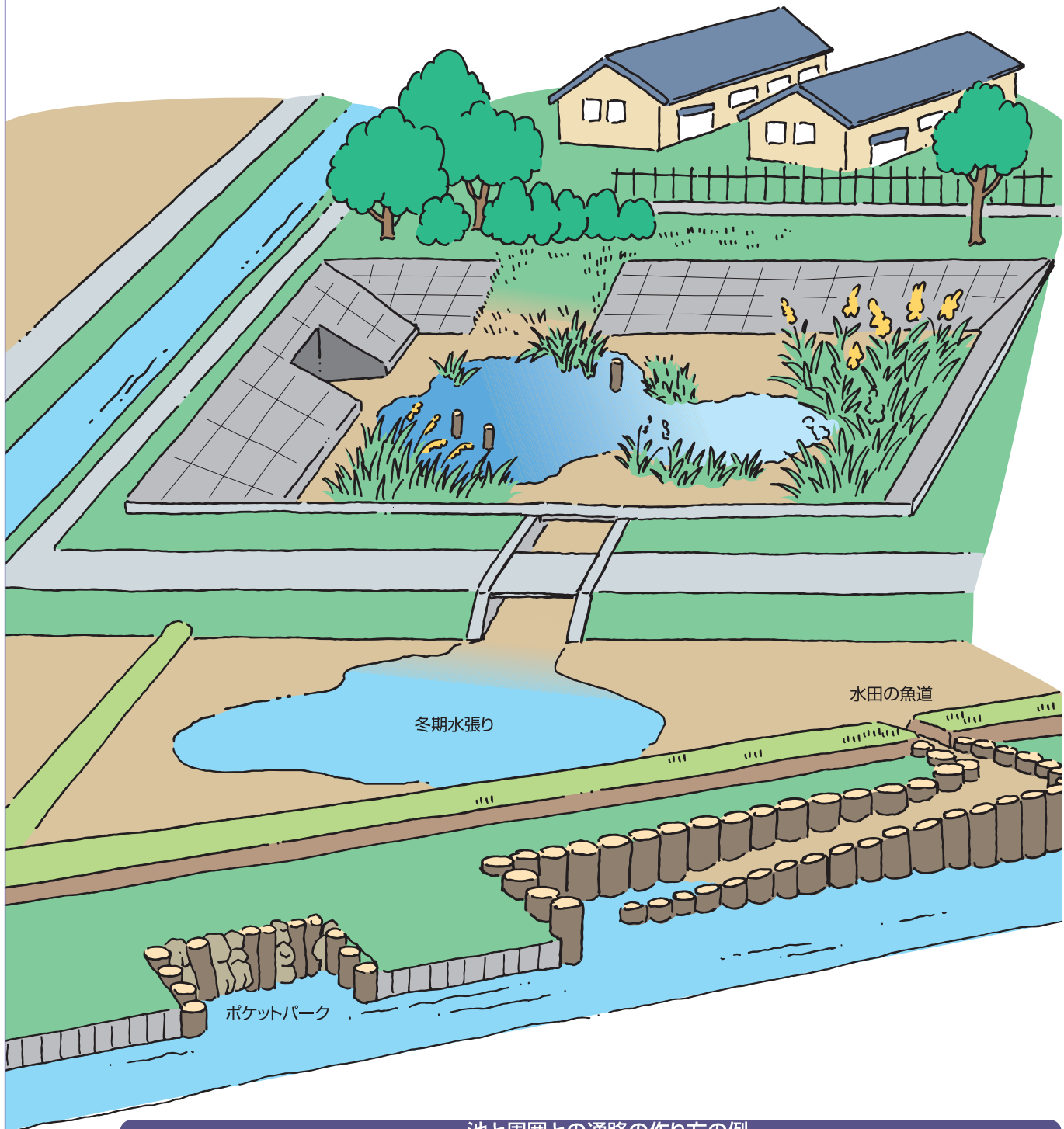
企業

工場緑化  
活動支援  
動物の道確保

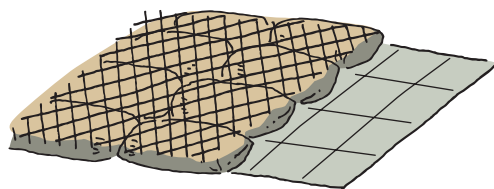


(3) 人工の池を活用した湿地環境の再生

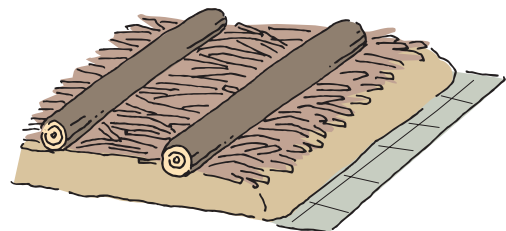
ア 護岸、池底の改修(比較的乾燥気味の人工の池)



池と周囲との通路の作り方の例



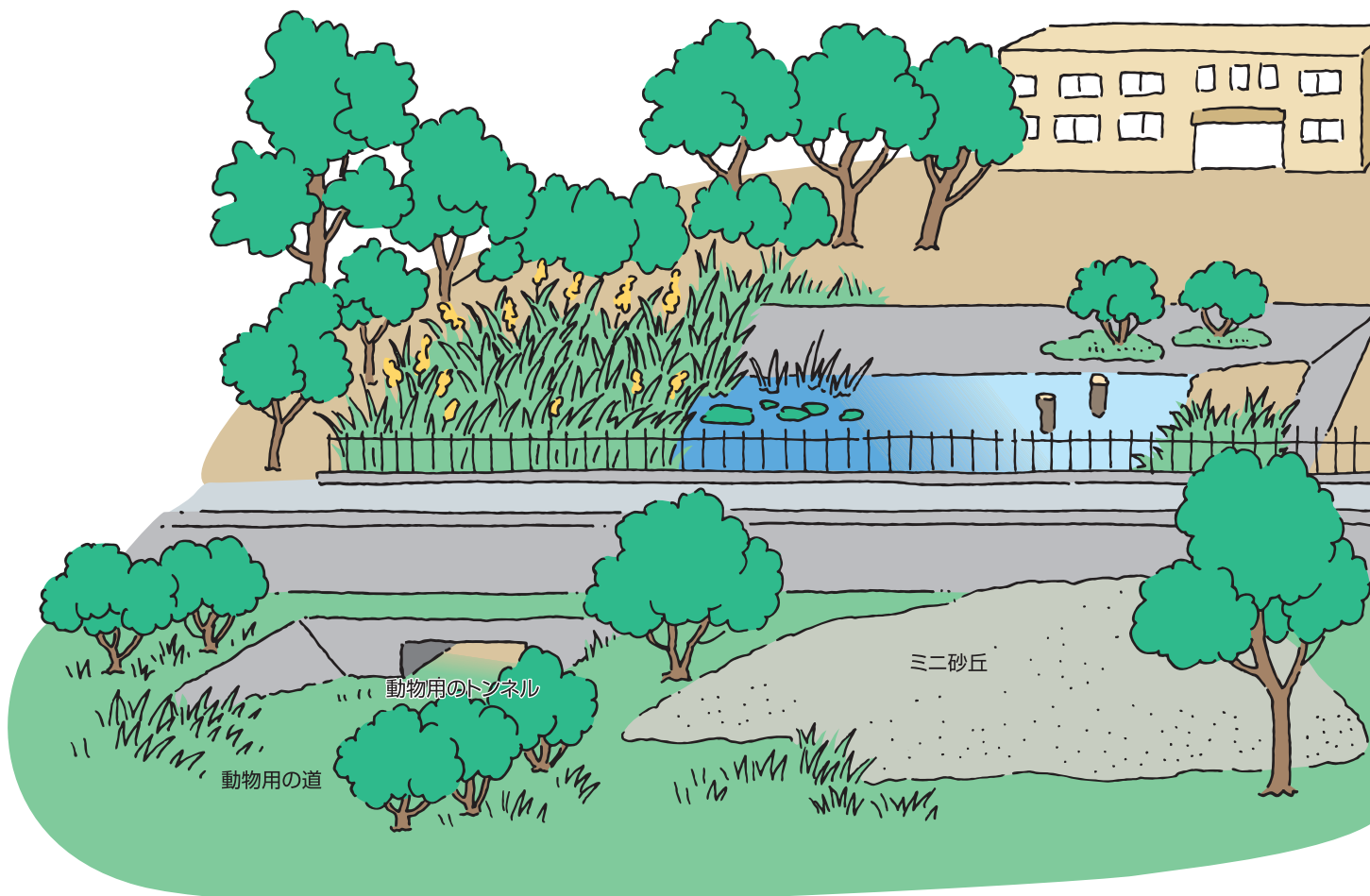
コンクリートブロックの上に土のうを敷き、金網で抑え、在来種の種を混ぜた土を播く。



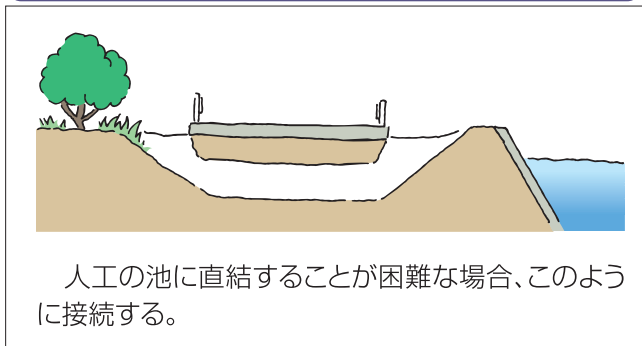
コンクリートブロックの上に土を盛り、ヤナギの枝やむしろなどで表面を覆い、丸太で抑える。



イ 護岸、池底の改修(雑木林に接し、常時水がある人工の池)



動物用のトンネル



人工の池に直結することが困難な場合、このように接続する。

動物用の道

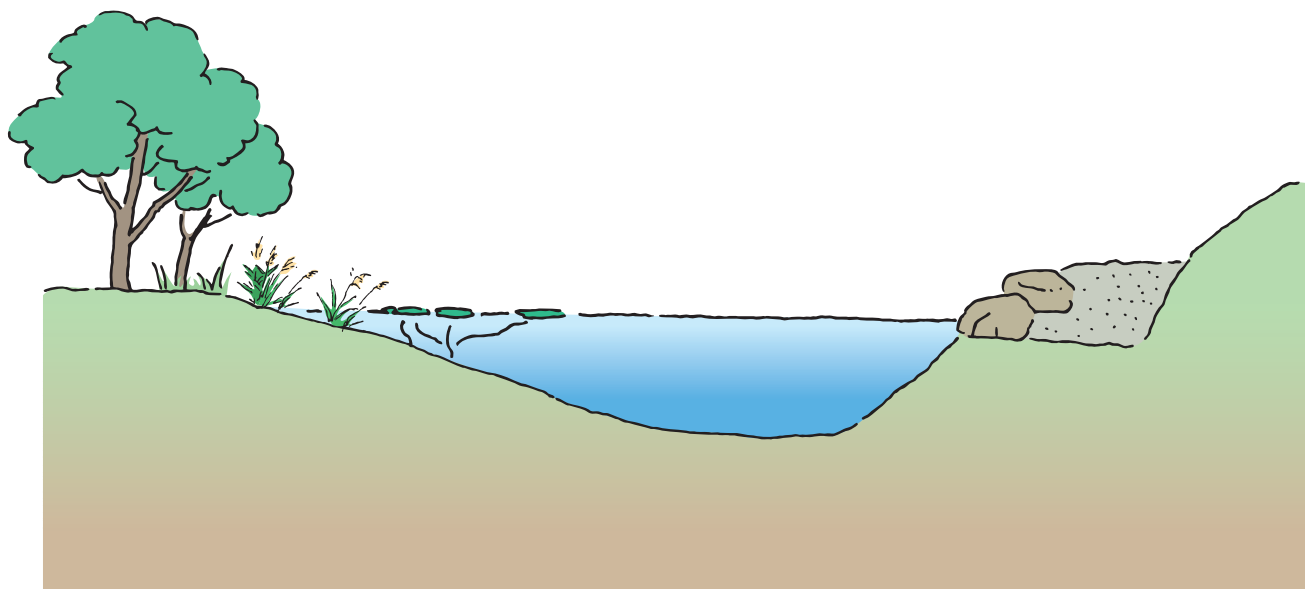
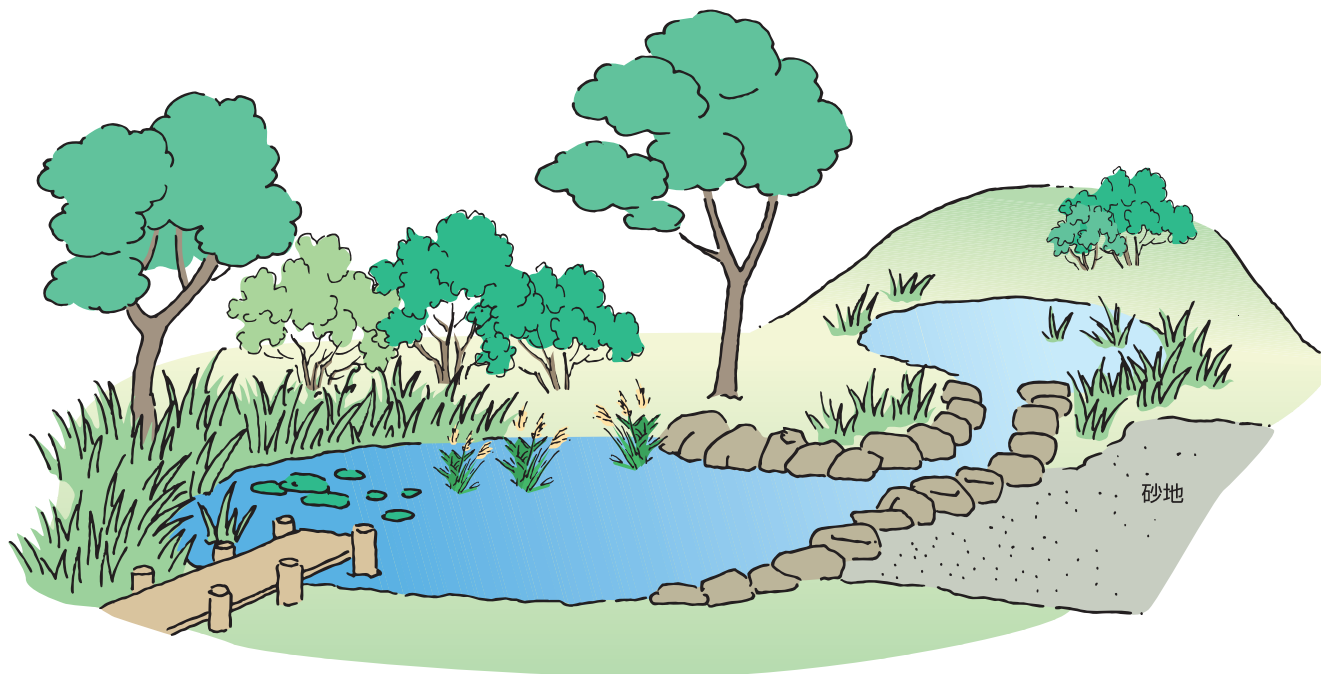


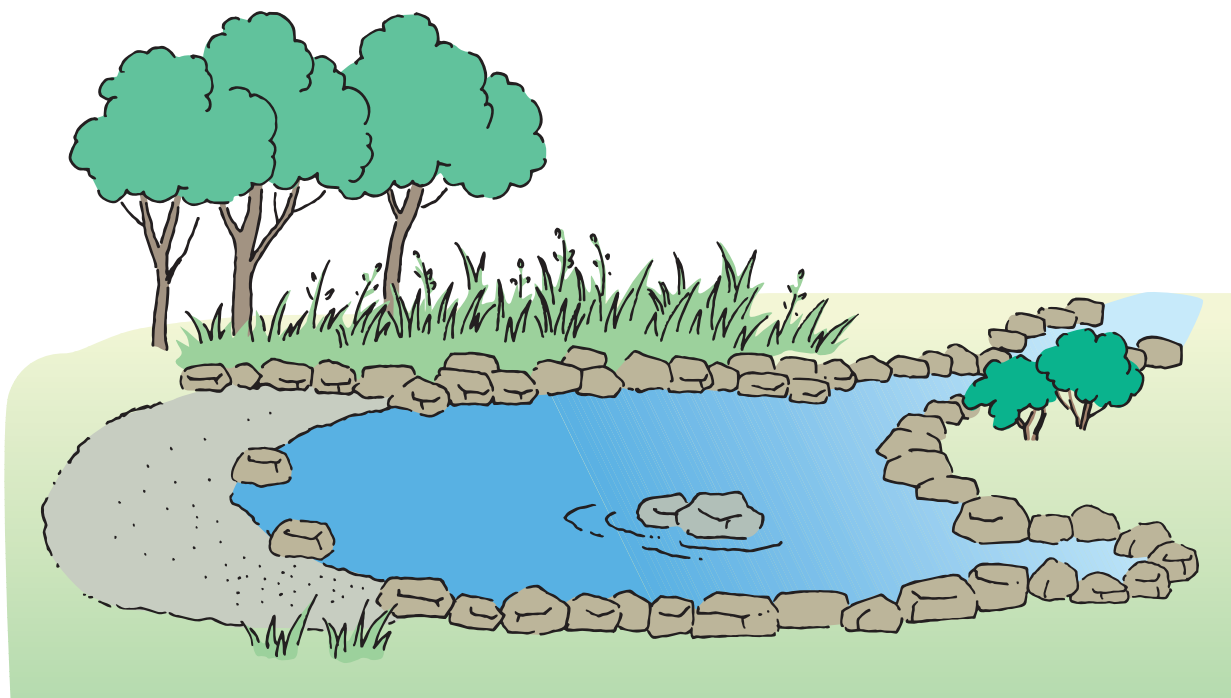
移動中の動物が見えないよう、低木や草本などが茂った環境とする。

共通事項

- 護岸ブロックを蛇籠に替えたり、ブロックの上に土を盛り、植物が生育できるようにします。
- 池の底の一部を掘り下げ、水深に変化を与えます。
- 大きな人工池の場合は、浮島を設置すると、鳥の休憩場所や営巣地になったり、浮島の下は魚の隠れ家や餌場になったりします。
- 池の周囲の草地や雑木林、水田などが道路で分断されている場合は、動物用の横断歩道などを設け、周囲の緑地との連続性を確保します。
- 隣接する雑木林の管理や、水田の冬期たん水などを行えば、一層効果的です。

ウ 池のあるビオトープ





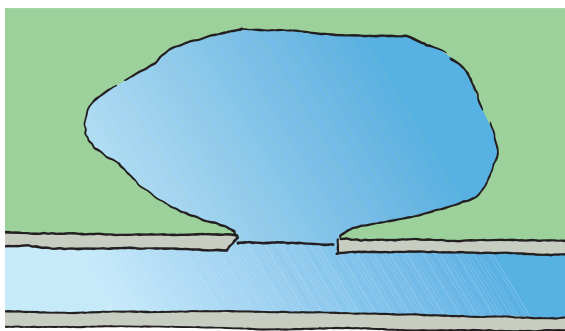
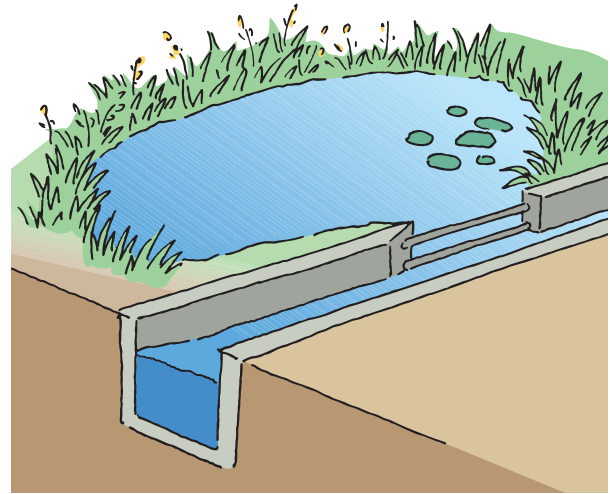
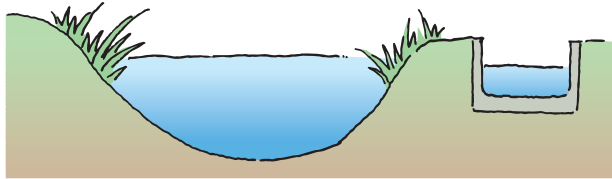
#### 共通事項

- 池は素掘りとし、漏水が激しい場合は、池を深めに掘り、防水シートを敷いた上に粘土質の土を20cm位盛ります。
- 水は、雨水を引いて利用し、雨の少ない時期は水道水などで補給するようにします。
- 沈殿池は、濾過を促すため、ガマなどの湿性植物を植えます。
- 砂利や玉石の部分に草が生えるのを抑制したいときは、砂利は厚く、玉石も一段だけでなく、厚く盛ったり、積んだりします。
- 湧き水や付近を流れる用水などから水が得られる場合は、自然の流れのように作ると一層多様な環境となります。

(4) 生き物のオアシス(ここでは、個人や小規模な団体でもできるような例を示しました。)

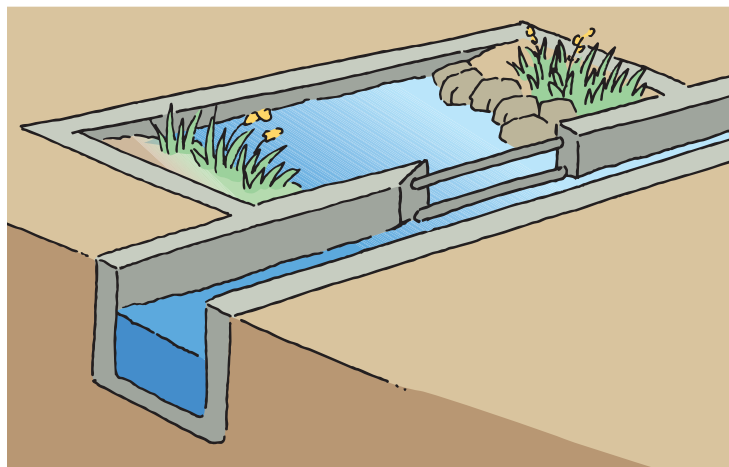
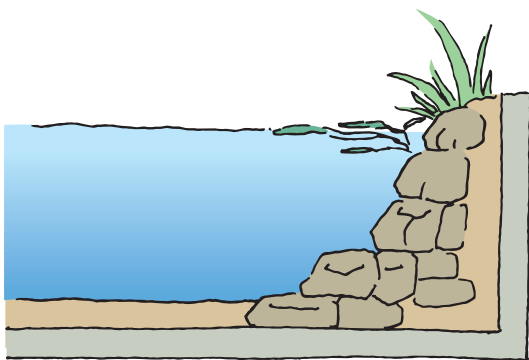
ア 水路編

水路脇に広い用地を確保できる場合



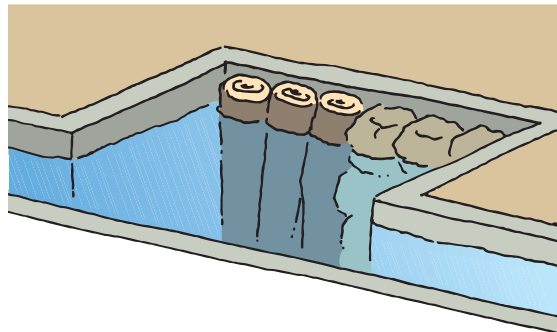
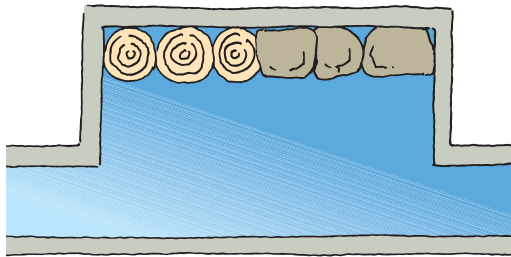
- 底は、冬期でも涸れることのないよう、水路の底よりも深くし、深さも変化を持たせるようにします。

水路脇に広い用地を確保できない場合1



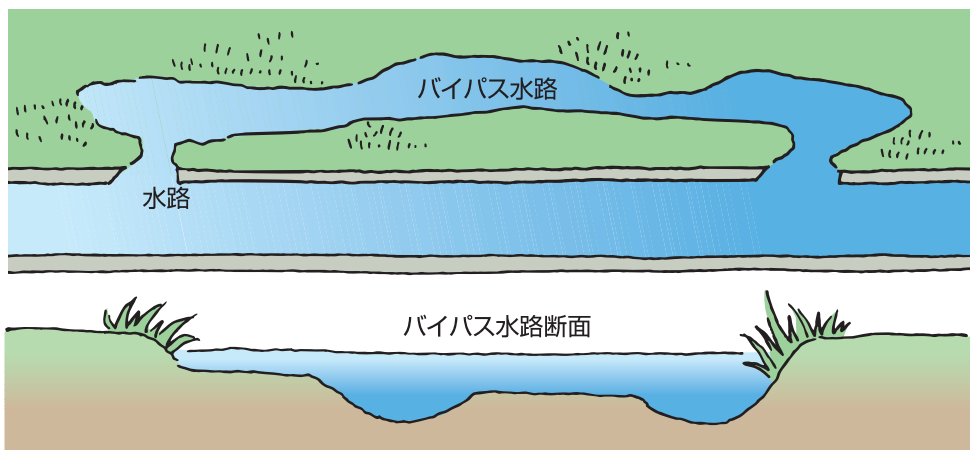
- 壁沿いに玉石を積み生物の住かを作ります。玉石の裏側には田の土等を盛り、植物が生えるようにします。

水路脇に広い用地を確保できない場合2



- 水路の一部を深くし、土（場合によっては小石、砂）を入れます。
- 水路幅を20cm程度でも広くできる場合は、壁面に大小のすきまができるような自然素材を張り付けます。

水路脇に細長い用地を確保できる場合



- 水路脇に細長い用地が確保できる場合、バイパス状に素掘りの水路を平行に通します。
- 可能なかぎり、幅を変えたり、深さに変化を持たせたりします。

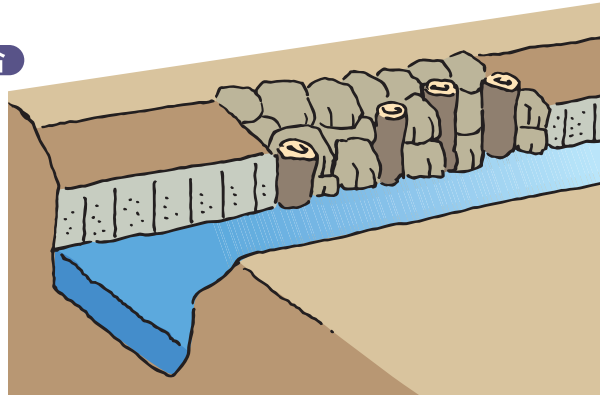
共通事項

- 水路、バイパス水路などの漏水が著しい場合（水が漏れたら困るとの指摘がある場合）などは、底から30cm以上の深さに漏水防止用シートを張ります。
- 水路との連結部は、水流の影響を軽減したり、ゴミなどの流入を防ぐため、下流部の側壁を流れの方向にカットしたり、パイプなどでスリット状にします。また、下流側に整流板を設けたりします。
- 底は、地域の河川などを参考に、小砂利や砂、土などを使い分けます。
- 水路や水路脇に、強い日陰にならない程度にヤナギ類などを植栽します。



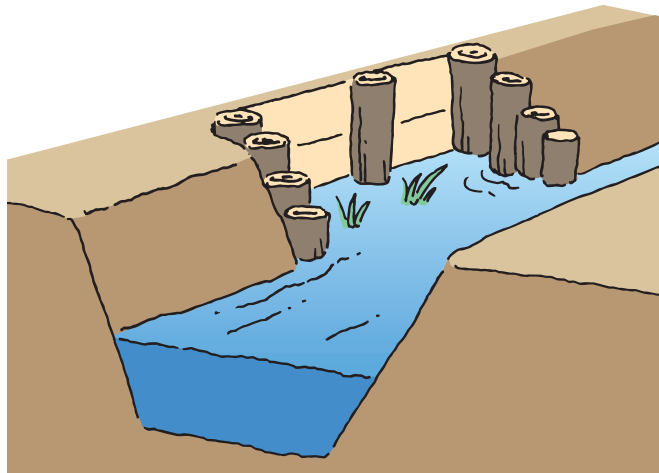
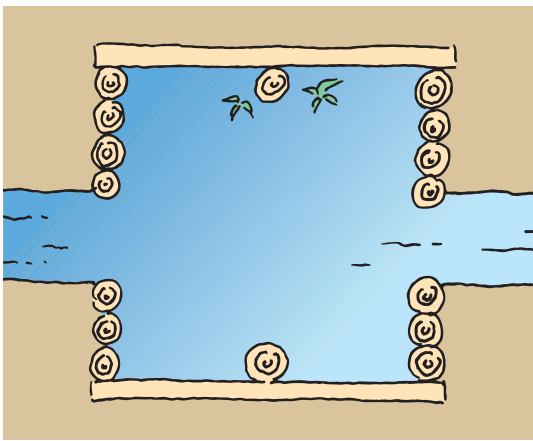
### イ 排水路編

#### 素掘り又は一部がコンクリート板の排水路の場合



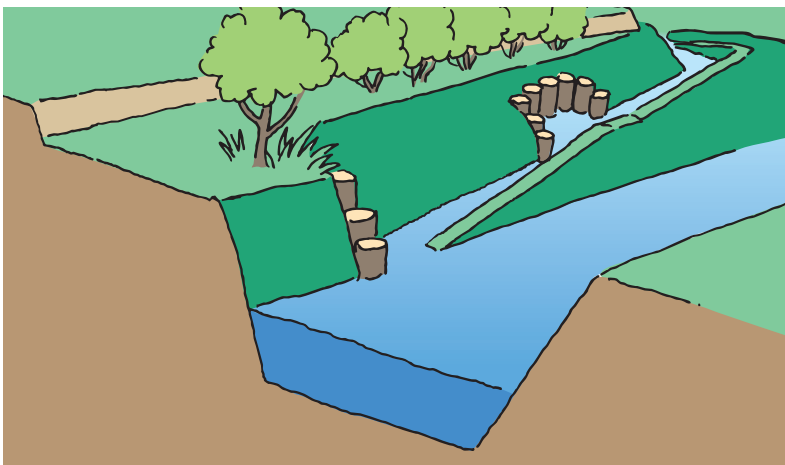
- コンクリート板に替えて、丸太と玉石の護岸とします。
- 部分的に水深を深くし、非通水期でも水溜まりができるようにします。

#### 素掘りの排水路の場合



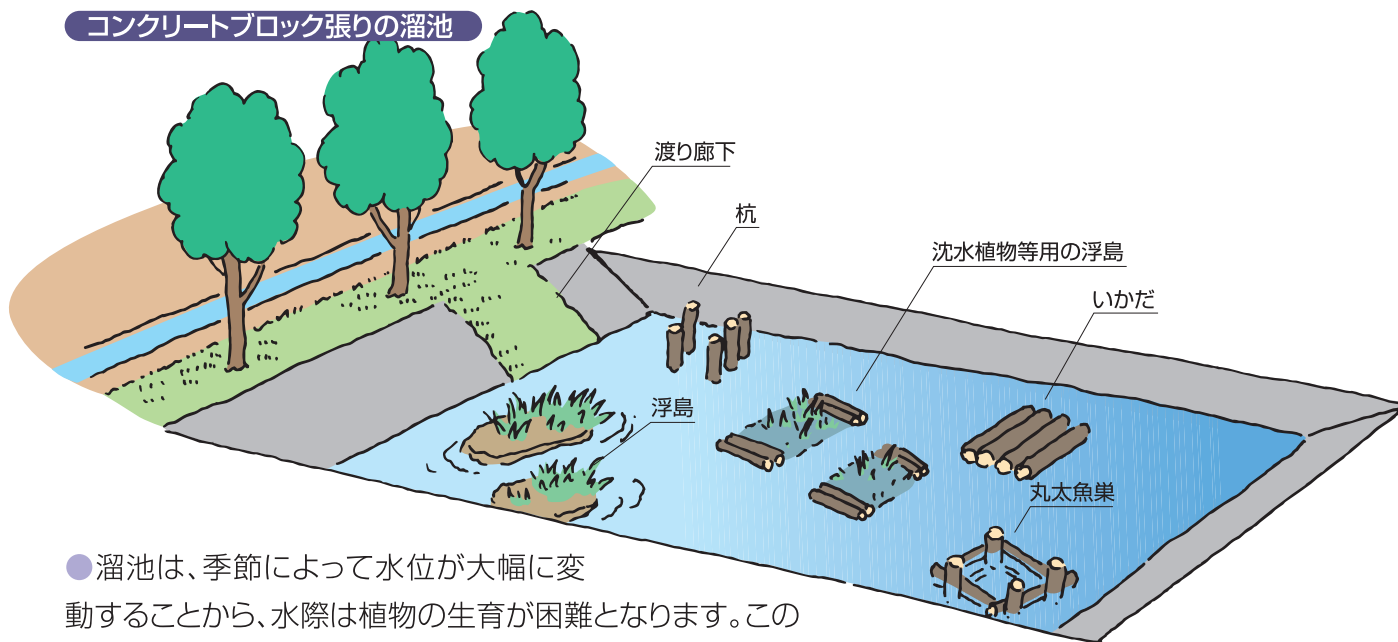
- 素掘りの排水路などで、法面の拡幅の余地がある場合、丸太や板で垂直な壁としたり、石組みで急な勾配として、水路の幅員を拡幅し、植物なども生えやすくします。
- 非通水期のことも考え、水深の深い場所も作っておきます。
- 空石積にすると、石の隙間が、動物の隠れ場所になったり、植物が生えたりします。

#### 排水路と田圃などを繋ぐ



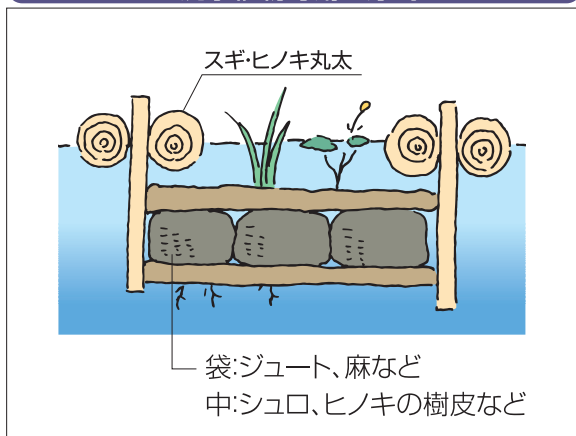
- 魚道の勾配は可能なかぎり緩くし、底は侵食されないよう玉石などを敷き詰めます。
- 途中途中に、魚などが休めるよう平坦で拡幅した部分を設けます。また、草や低木に被われるようにして、鳥などによる捕食を防ぎます。

コンクリートブロック張りの溜池

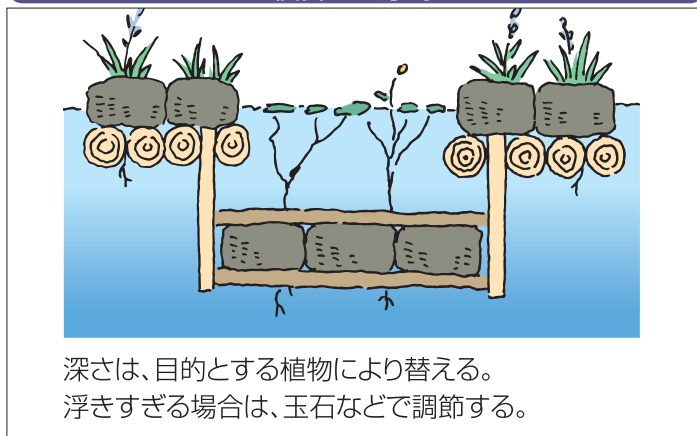


●溜池は、季節によって水位が大幅に変動することから、水際は植物の生育が困難となります。このため、浮島やいかだを浮かべたり、杭を多数打ち込んだりして、生物が定着できる場所を少しでも増やします。

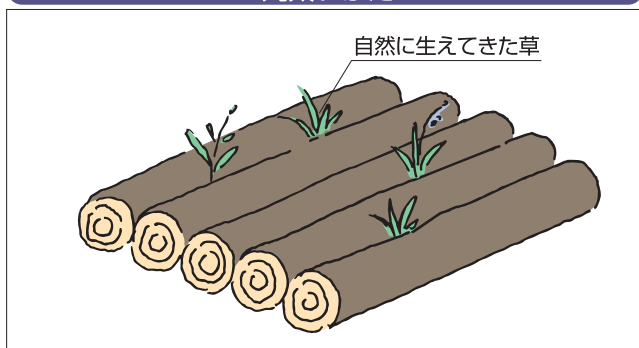
沈水植物等用の浮島



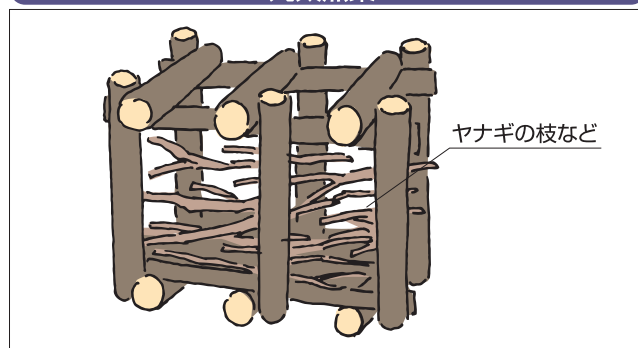
複合型の浮島



丸太いかだ



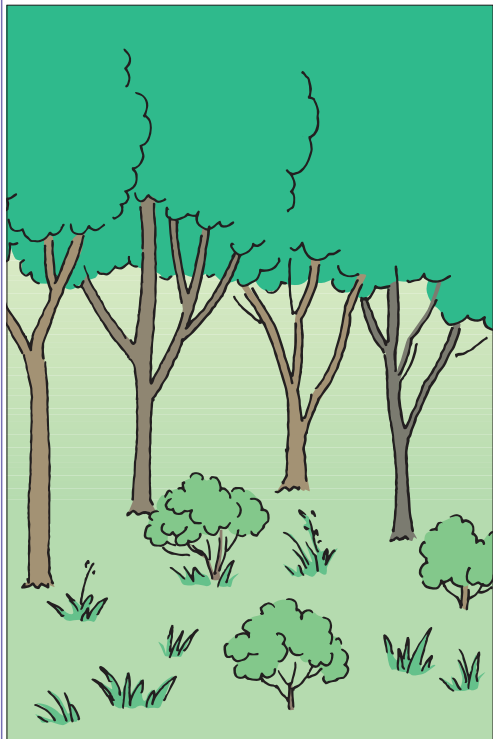
丸太魚巢



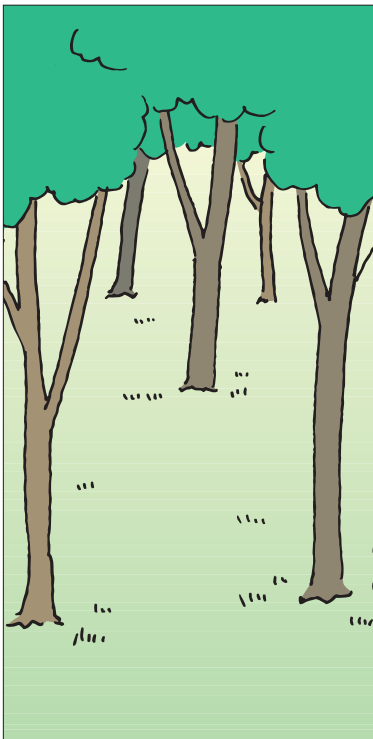
- 生育を目的とする植物に合わせて、沈める深さは調整できるようにします。
- 浮力が大きすぎるときは、石などを載せて調整します。
- 浮島などの下に伸びた根は、魚などの隠れ場所、餌場、産卵場所などになりますが、ソウギョが生息している所では、食べられないよう金網などで囲います。また、根の替わりになるようなものを吊しておく方法もあります。

(5) 雑木林の管理

シラカシが繁茂してきた雑木林



数年に1回下刈りを行っている雑木林



毎年落葉かきを行っている雑木林

アズマネザサが繁茂している雑木林



伐採1年後の雑木林

雑木林の管理と特色

シラカシが繁茂している	シラカシを優占種とする極相林への遷移途上で、近い将来シラカシ林に移行し、林床も暗くなることから、下層植生も変化することが予想されます。森林の管理がほとんど行われていない台地の雑木林などでよく見られます。
数年に一回下刈り実施	下刈りの頻度にもよりますが、間隔が長いほど、林床は多年生の草本類が占める割合が高くなります。また、低木類やササ類も見られます。
毎年落葉かきを実施	毎年、落葉かきが行われることで、低木、多年生草本、ササ類などの生育が抑制されます。また、落葉が除去されることで、腐植の多い場所では発芽あるいは生育ができない植物の進入も見られます。
アズマネザサが繁茂	林床はアズマネザサで占められ、他の植物はほとんど見られなくなります。低木類の生育も抑えられるため、高木が枯れた跡も更新が進まず、高木層も虚ろになってきます。丘陵部の雑木林ではこのような林が非常に多くなっています。また、丘陵部では、ヒサカキが低木層を占めている場合もあります。茂みを好む鳥や動物の隠れ場所、ねぐら、繁殖場所になります。
伐採跡	伐採を定期的(20年程度)に実施することで、雑木林としての活力を維持します。伐根から新しい芽が出て短期間で森林が再生します。また、伐採により地表が明るくなることから、多様な植物が芽生え、生育をはじめます。

## 6 指標種

生物多様性を保全するには、多種多様な生き物がくらす環境を維持する必要があります。環境は多種多様な生き物が複雑に関係しあって形成されていることから、実際にその環境が生き物にとって良好かどうか簡単に判断することは大変難しいものです。そこで、ある環境に表れやすい生物(指標生物)の存在を確認すると、おおよその環境状態を把握できます。

レッドデータブックに掲載されている生き物でも、適した環境が回復すれば、生息・生育が容易になります。できるだけこのような特質をもつ生物を選んで指標種とします。

### (1) 指標植物

指標植物	主な生育地				指標生物が表す環境
	低地	台地	丘陵	山地	
ハンノキ	○				低地に生育する代表的な樹種。 県東部の湿地や水田に広く分布していた。
モミ シキミ			○	○	暖温帯から中間温帯にかけての乾燥した土地の自然林に見られる代表的な樹種。 シキミはモミ林やアカガシ林の林床に見られる代表的低木。
スダジイ シラカシ	○	○	○		暖温帯の極相林を構成する代表的な樹種。 シラカシは主に平地の極相林を代表する。
ウワミズザクラ		○	○	○	丘陵から山地にかけての二次林で普通に見られる樹種。 湿潤な日当たりのよい斜面に生育する。
エゴノキ	○	○	○	○	低地から山地にかけての二次林で普通に見られる樹種。 平坦部や谷間の緩斜面に生育する。
マルバアオダモ		○	○	○	丘陵から山地にかけての二次林で普通に見られる樹種。 やや乾燥した尾根によく生育する。
ヒサカキ		○	○		照葉樹林やアカマツ林、タケ林などによく見られる。 丘陵地では雑木林の管理が行われなくなった林で一斉に生えてくる。
ヒシ	○	○	○		県内のほぼ全域で見られたが、最近著しく減少している。 良好な池沼環境であることを示す。
カタクリ		○	○	○	土壌が厚く腐植層に富み、草刈りなどの管理がよくされている雑木林の北斜面に生育する。
アマナ	○		○		川沿いの草原や、芝地、疎林の縁などの日だまりに生育する。 定期的な草刈りなどにより植生遷移が進んでいない状況を示す。

(2) 指標動物

	指標植物	主な生息地				指標生物が表す環境
		低地	台地	丘陵	山地	
ほ乳類	ニッコウムササビ		○	○	○	大木のある良好な森林に生息する。
	ニホンリス		○	○	○	森林を伝って移動するため広い森林の分布を必要とする。 広大な森林の連続性が確保されていることを示す。
鳥類	アオゲラ	○	○	○	○	落葉広葉樹林、針広混交林などに生息する。良好な森林環境が存在していることを示す
	カワセミ	○	○	○	○	河川、池沼、用水路等の水辺に生息する。良好な水辺環境、特に土が露出した護岸や崖などが存在する必要がある。
	ヒバリ	○	○	○		畑、草原、荒地、河原等に生息する。 自然的、半自然的なオープンスペースの存在を示す。
	サシバ		○	○		谷津田に面した斜面林に営巣し、谷津田と林を餌場としている。 広域的な谷津田環境が残されていることを示す。
	サギ類	○	○	○		水田や水路を主な生活環境とする水田地帯を代表する鳥類。 カエルなど生きものが豊かな水田に生息する。
	オオヨシキリ セッカ	○				ヨシ原を代表する鳥。 湿地や湖沼周辺のヨシ原を主な生息地とする。
両生類	ヤマアカガエル		○	○		樹林に接する湿田や浅い水たまりに産卵し、成体は樹林内で生活する。 良好な谷津田環境が維持されていることを示す。
	トウキョウ ダルマガエル	○	○	○		水田、池沼、水の流れの緩やかな川などに産卵する。 湿地性の生物が生息(繁殖)しやすい環境であることを示す。
	トウキョウ サンショウウオ		○	○		成体は林の中や沢沿いの湿潤な場所で生活し、林の中の小さな水たまりに産卵する。 生息地及び上流域が広葉樹林であることが必要。
魚類	ホトケドジョウ	○	○	○		水が冷たくて澄んだ、流れの緩やかな細流等で、底質が砂礫ないし砂泥で、かつ水草の生えている場所に生息する。
	メダカ	○	○	○		灌漑用水路で冬を過ごし、田に水が張られると餌を求めて田に移動する。 水路と田との連続性を示す魚。
	ナマズ	○	○	○		灌漑用水路や沼等に生息。 梅雨期の増水時に浅瀬で産卵する。
昆虫類	ミヤマアカネ		○	○		灌漑用水路などの緩流と水田、雑木林がセットになった環境に生息する。 里山を代表するトンボ。



指標植物	主な生息地				指標生物が表す環境	
	低地	台地	丘陵	山地		
昆虫類	カトリヤンマ		○	○	雑木林とセットの乾田やその脇の水路に幼虫が生息する。 良好な状態の乾田の存在を示すトンボ。	
	モートンイトンボ	○	○	○	日当たりのよい開放水面が点在する貧栄養な湿地を好む。 湿地性生物にとって良好な状態の休耕田を示すトンボ。	
	ギンヤンマ	○	○		平地の溜池を代表するトンボ。 開放水面を好む。	
	チョウトンボ	○	○		抽水植物が繁茂する溜池などに生息する。	
	ヘイケボタル	○	○		止水域に生息し、林に囲まれた水路、湿地、休耕田、水田などに生息する。 ある程度の乾燥にも耐えられ、乾田にも生息する。	
	ゲンジボタル		○	○	○	灌漑用水路や小河川など流水に生息する。 ヒメタニシやカワニナを捕食するため、これらの貝が生息できる環境が必要。
	オオムラサキ		○	○	○	管理された雑木林を代表する蝶で、国蝶に指定されている。
	ミヤマセセリ		○	○		桜の咲く頃の落葉樹林に出現する。 幼虫の食草はクヌギ、コナラなど。
	アカシジミ		○	○		6月中旬頃だけ、クヌギ、コナラの多い雑木林で見られる。 幼虫の食草は、クヌギ、コナラなどブナ科のコナラ属。
	オオミドリシジミ		○	○		幼虫はコナラを食樹としている。 下草刈りや萌芽更新により管理された雑木林に生息する。
	ウラナミアカシジミ		○	○		6月頃、低地から山地のクヌギを主とした雑木林で見られる。 幼虫の食樹はクヌギとコナラで、特に若いクヌギの林を好む傾向がある。
	ミドリシジミ	○				水田地帯を代表する樹種であるハンノキ林に依存して生息する。
	ハルゼミ		○	○		4月下旬から5月下旬に出現する。松林に限って生息する。 良好なアカマツ林の存在を示す。
	貝類	ドブガイ	○	○	○	泥質の池沼に生息する二枚貝。 良好な池の状態であることを示す。
ヤマトシジミ		○	○		塩分のある水域の砂、または、砂泥地に生息する。 良好な河川、池、沼の状態であることを示す。	
マシジミ		○	○		湖岸や流入河川の砂地に生息する小型の二枚貝。 良好な河川、池、沼の状態であることを示す。	

### (3) 生物多様性の低下をもたらす指標種

最近、コクチバスやアライグマなど、侵略的な外来種による在来生物への脅威が伝えられています。

外来種の中には、日本の気候、風土に合わず自然にいなくなるものもありますが、中には天敵がない、競争力が在来種よりも強いことなどから、旺盛な繁殖力を発揮して在来の植物や動物を駆逐するものも少なくありません。放置しておくと、在来の生き物が捕食されたり、住みかを奪われたりして生物多様性が低下することになります。

ここでは、多くの外来種の中でも、特に在来種に及ぼす影響が大きいと予想されるもので、埼玉県内で確認されている種を掲載しました。

#### ア 植物

主な侵入地

和名

河川敷

イタチハギ、ハリエンジュ(ニセアカシア)、アレチウリ、オオオナモミ、オオブタクサ、セイタカアワダチソウ、オニウシノケグサ(トールフェスク)、シナダレスズメガヤ(ウイーピングラブグラス)、コバナキジムシロ、アメリカセンダングサ、オオアレチノギク、ククイモ、ハルシャギク、ヒメムカシヨモギ、ヒロハハウキギク、カモガヤ(オーチャードグラス)

池沼・湿地

オオフサモ、オランダガラシ(クレソン)、コカナダモ、ミズヒマワリ、オオカナダモ、キショウブ、

落葉樹林

モウソウチク、シュロ、オニマタタビ(キウイ)、ニワウルシ(シンジュ)、ウスギモクセイ、ベニバナボロギク、ヤダケ

#### イ 動物

生息区分

和名

水生

ヌートリア、オオクチバス、カダヤシ、ブルーギル、コクチバス、アメリカザリガニ、カミツキガメ、ウシガエル、ミシシippアカミミガメ

陸生

アライグマ、ハクビシン、ガビチョウ、カオグロガビチョウ、ソウシチョウ